

## 小論文

### 第 1 問

下記の文章は、ブライアン・オーサー『チーム・ブライアン 300 点伝説』（講談社、2017 年、92-94、252-254 頁）の一節である。文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、作問の都合上、本文の一部を改変した。

なぜヨナ（キム・ヨナ）にとって「コミュニティ」がオリンピックでの重圧を撥ね返す強さになったのでしょうか。ユヅル（羽生結弦）とハビエル（ハビエル・フェルナンデス）にとっては、やはり精神的な強さになるのでしょうか？他の選手にとっては？他のコーチにとっては？

クリケット・クラブ（トロント・クリケット・スケートティング&カーリングクラブ）のヘッドコーチになり、コミュニティを築こうと誓ってからちょうど 10 年目、改めて①コミュニティの意義を考え直そうと思い立ちました。そこで私は自分自身のために、またコーチたちもこの「コミュニティ」というゴールを再認識してもらうために、ミーティングを開きました。2015 年春先のある日の午後です。ホワイトボードにはこう書きました。

「コミュニティとは何か？」

「コミュニティにおけるコーチの任務とは？」

すると、それぞれのコーチからさまざまなワードが飛び出しました。

「支援、幸福、礼儀、優しさ、気づき、常識、寛大、信頼、安全、生産的、成長、辛抱、コミュニケーション、理解…」

何ひとつとして、間違った答えはありませんでした。実際には何が正解というものでもありません。すべてのコーチが、コミュニティの意味を理解しようと考え、お互いを理解し、自分もこのコミュニティの意味を理解しようと考え、お互いを理解し、自分もこのコミュニティのメンバーの重要な一人であると感じてほしかったのです。私たち全員にとって、素晴らしい頭のエクササイズでした。その後、私の友人の母親が、この文字をキルトに刺繍して、大きなブランケットをこしらえてくれました。彼女は癌の闘病中だったのですが、病気と闘いながらこのキルトを製作してくれました。そのブランケットはいまでもコーチ室に飾ってあります。

なぜ、こうもスケートの練習以外のことにこだわるのか。スケートを教える真の目的は、単に試合で勝たせることではないからです。競技者でいられるのは、人生前半のわずかな期間に過ぎません。しかも一流選手になれるとは限りませんし、将来スケートにかかわる仕事をするとも限りません。コーチとして働く私たちはスケートにかかわる人生が当たり前になっているので、このことを忘れがちですが、人生がスケート一色になって幸せかどうかは、生徒に選ぶ権利があります。だからこそ私とトレーシーは、このリンクを去ったあとの選手の人生が豊かであってほし

いと考えているのです。

勝利だけを目指して練習していたら、コーチや両親が自分をサポートしてくれるのが当たり前になり、自己中心的で、なんでも人任せになり、周りに感謝できない人間に育ってしまいます。しかしコミュニティのなかで育っていけば、サポートに感謝し、選手もコーチもスタッフもそれぞれを尊重し合うことを覚え、それが社会に出てから役立ちます。目上の人と話すことで、きちんと挨拶ができて、相手に敬意を払える人物になってほしい。人間的に成長してほしい。自分への責任も持ってほしいのです。

(中略)

スケートファンの方々は、私がユズルやハビエルといったトップ選手だけを教えているコーチだと思っているかもしれませんが。しかし実際は違います。クリケット・クラブの早朝のクラスではまだヘルメットをかぶっているような小学生の子どもたちを教え、午前のセッションではスケートを愛するマダムたちへのレッスンをします。クリケット・クラブにはスケートを愛してやまない老若男女が集まり、私は誰にでもコーチをします。私たちコーチは、どんなトップ選手でも、スケートの楽しさや競争心、前向きな気持ち、お互いを助け合う気持ちを失わずに選手を続けてほしいと思っています。

②すでに何度もお話ししてきましたが、私たちチーム・ブライアン<sup>®</sup>の最終目的は、「選手がここを巣立ったあとに人生に役立つツールを授けること」です。

ついこのあいだも、私のチームで5年練習してきたロシア出身の少女に、大学に出す願書の推薦状を書いてほしいと頼まれました。私はとても嬉しく思いました。彼女がどれほどこのクラブで頑張っていたか、熱心だったか、大学に通って勉学を身につけるだけの資質を備えているかを書きました。スケートに出会い、スケートの練習を頑張ったことが、次の人生につながるの素晴らしいことです。クリスティーナ・ガオ（米国）にも推薦状を頼まれ、彼女は2012年秋にハーバード大学に進学しました。2015年6月にはスケートを引退し、学業に専念する人生を選びました。とても誇らしいことです。

選手たちがクリケット・クラブを巣立ったあとにも、彼らの人生は続きます。ここでの経験が人生の役に立つことが、私の願いです。選手は20代半ばまで競技から引退することが多いのですが、そこから人生はもっとずっと長いからです。どんな仕事に邁進しようと、家庭を持とうと、ここで私たちが教えてきたことはすべて、彼らの人生に影響を与えるのです。

私はこんなふうに願っています。私の教え子がいつか仕事で悩んだときに、「あのときブライアンはこんなアドバイスをしてくれたな、こんなふうに解決してくれたな」と思い出してくれること。人間関係で悩んだときも、「ブライアンはこう、トレーシーはこう、他コーチはこんな役割だったな。それぞれ違う人間で性格が違っても、お互いを認め合っていたな」。子育てに奮闘しているときは、「あのときトレーシーはこんな母親のようだったな、ブライアンはこんな父親のようだったな」と。そうやって人生の節目節目で、私たちのことをちょっとだけ思い出してくれたらいいなと思います。

ユヅルとハビエルの2人とは、私はずっといい関係でいられる気がしています。2人はまったく違う性格で、違うストーリーを歩んできました。オリンピックまで含めれば、人生でもっとも色濃い6~7年をともにしてきた仲間ですから。

ハビエルは平昌オリンピック後に引退したら、いずれは素晴らしい先生になるでしょう。オリンピック後はあちこちのショーに呼ばれて忙しい時間が数年続くとは思いますが、将来的には素晴らしい先生になるタイプなので、しっかりコンタクトを取り続けたいと思います。彼は人に教えることが大好きで、しかもそれに情熱を持っています。ただし朝早いのはダメですが・・・。きっと午後から教えることになるのでしょう。

ユヅルは大学の勉強を続けるかもしれません。彼には幅広い才能がありますから、どんな分野にいてもうまくやっていけるはずです。語学もじゅうぶん身につけましたし、医学分野でも教育分野でも、どんな分野でも一流になれるでしょう。なぜならユヅルは、目標の立て方や努力する方法、それを実現する意欲の持ち方のすべてを知っているからです。また勉学とは別に、彼は日本人選手の素晴らしいメンターになれるでしょう。個々の生徒を教える先生になるのではなく、自分の経験と大変な努力を活かし、メンターとなって、日本の後輩たちを世界のトップ選手に育て上げる活動ができるはずです。いずれにしても、2人が社会人として経済的にも社会的地位でも立派な生活を送れると予測できるのが、私にとって一番の安心です。親が子どもに望むのと同じです。スケートのおかげで今後の人生を歩んでいける準備をさせることが、私の役割なのですから。

## 設問

### (1) 下線部①コミュニティの意義について

- (i) ここでの「コミュニティ」とはどのようなものか、50文字以内で答えなさい。
- (ii) スポーツに関わる上で「コミュニティ」が重要な役割を果たすのはなぜでしょうか。その理由を200文字以内で述べなさい。

(2) 下線部②すでに何度もお話ししてきましたが、私たちチーム・ブライアンの最終目的は、「選手がここを巣立ったあとに人生に役立つツールを授けること」です。とあります。競技者として、スポーツを通じて得られる「人生に役立つツール」とは、どのようなものが考えられますか？文章中の語句を用いつつ、あなた自身の経験も含めて250文字以内で述べなさい。

## 第2問

下記の文章は、滝口隆司「大学スポーツを『特殊化』させるな」友添秀則編『現代スポーツ評論 36～大学スポーツの産業化』（創文企画、2017年、109-117頁）から抜粋したものである。文章を読んで、後の問いに答えなさい。

企業スポーツの崩壊から学ぶ点も多い。企業がスポーツ部の目的を社員の福利厚生や一体感の醸成から広告宣伝にと転換し始めた頃から、その歯車はかみ合わなくなったのではないか。スポーツ部に所属する社員たちは社業から離れ、競技に専念するようになっていった。その結果、スポーツ部員と一般社員の関係は希薄なものとなり、社員からの理解や応援を得にくくなった。そして、バブル経済が崩壊した途端、各企業はスポーツ部の休廃部を一斉に推し進めた。スポーツ部が存続した企業でも選手は正社員ではなく、契約社員が多数を占めるようになった。

大学スポーツも、大学側の経営の論理が優先されて利益追求の道具になると、その危険が出てくる。企業スポーツの「社業」を「学業」と置き換えればいい。大学スポーツの選手も学業そっちのけで競技を優先させることにより、①大学内でスポーツはますます「特殊化」していくだろう。ビジネス化を過度に進めると、勝利至上主義の考えが蔓延し、選手獲得や指導者の成果を巡ってひずみが生じてくる。少子化の中で経営が傾いてくれば、いずれスポーツ部を閉鎖する大学が現れるかもしれない。

中学や高校の運動部活動に比べ、大学の体育会は敷居が高い。より高度な実力や専門的技術を求められるため、そのレベルに達しない学生たちはサークル活動に回って楽しんでいる。だが、これからは急速に子どもが減り、スポーツ人口も減少していく。その中で大学スポーツにも衰退の懸念が出てくる。

今、取り組むべきは、「活性化」の名の下に特殊化や商業化を推し進めるのではなく、大学スポーツの門戸を広げることである。地域スポーツとの共生を模索するところも現れており、鹿屋体育大・福永哲夫学長の「大学スポーツの振興に関する検討会議」での発表によると、大学を基盤として各地に設立されている総合型スポーツクラブは、17都道府県の29大学に及ぶという。総合型クラブが社会に根付いたとは言い難いが、大学でスポーツに取り組む学生たちは将来、指導者になる可能性もある。大学が地域とのつながりを持つことは、底辺を支える上でとても意義がある。

スポーツ部の強化で大学の知名度を上げることだけが大学スポーツの役割ではない。スポーツを深く学んだ学生たちが人間的にも成長し、スポーツの価値をあまねく社会に還元させていく。大学スポーツに関わる人たちには、その原点に立ち返り、改めて理想を追求してほしいものである。

設問

(1) 下線部①大学内でスポーツはますます「特殊化」していきだろう。について、その理由を、企業スポーツの崩壊になぞらえて、100 文字以内で述べなさい。

(2) 文章の趣旨を踏まえて、高知工科大学で、「大学スポーツ」に関わっていくあなた自身の“理想”について、400 字以内で述べなさい。